

『学び合い』授業における学習者の変容についての事例的研究 小学校国語科における単元「レイチェル＝カーソン」の実践から

上野 佳奈恵*・西川 純**

(令和元年5月20日受付；令和元年11月25日受理)

要 旨

本研究の目的は、国立教育政策研究所（2018）が課題として公表した「話し手の意図を捉えながら、自分の意見と比べ、自分の考えをまとめる」に着目をして課題を作成し『学び合い』の授業を行う事で、学習者が国語に対して抱えている考え方や苦手感の変容や授業中の発話の変容を明らかにするものである。その結果として、『学び合い』授業の前後で国語に対する苦手感が減少した。さらに学習者の発話の内容にも変容が見られ、【根拠を示して説明】【同意】【注意・促し】の発話数が増加していることが明らかになった。

KEY WORDS

Elementary School 小学校, Japanese Language Department 国語科, 『学び合い』

1 問題の所在

平成29年3月告示の小学校学習指導要領の国語科の目標では、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力の育成が重視されている⁽¹⁾。また、同年に告示された小学校学習指導要領の総則では、学習の基盤となる資質・能力についてふれており、全ての教科等においてそれぞれの特質に応じた言語活動の充実を図ることが必要であるが、特に言葉を直接の学習対象とする国語科の果たす役割は大きいと述べている⁽²⁾。様々な資質・能力が求められている中、国立教育政策研究所（2018）は、平成30年度全国学力・学習状況調査の結果を公表しており、小学校国語の調査結果によると、文の中における主語と述語との関係などに注意して、文を正しく書くことや相手や、話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして自分の考えをまとめること、話し手の意図を捉えながら聞き、自分の意見と比べるなどして、自分の考えをまとめることに課題があると公表している⁽³⁾。本研究では国立教育政策研究所（2018）が課題として公表していた小学校国語科の課題である「話し手の意図を捉えながら、自分の意見と比べ、自分の考えをまとめる」に着目し、進めることとした。

授業内での対話型授業に関する研究は多くある。

佐藤（1999）は、国語科の授業において対話型授業を行うと教師主導型授業よりも明らかに児童が、何が意見の対立になっているのか、相手の考え方と自分の考え方とはどこが違っているのかをお互いが意見を述べていきながら明確にしていくことができるようになると述べている⁽⁴⁾。丸野（1999）は、対話型授業に関して「自分とは異なる世界や価値に生きている他者への関心や思いやりの気持ち」「他者の立場を配慮した社会的なコミュニケーション能力」「相互啓発や協調性」などの意欲や能力が育つといった期待があるとも述べている⁽⁵⁾。これらのことから、対話型授業の効果が期待できると言える。さらに学習者同士の関わりを通して授業改善が見込まれる『学び合い』の考えがある。『学び合い』とは西川（2015）の提唱する授業の考え方であり、「授業観」「学校観」「子ども観」の3つから成り立っている⁽⁶⁾。『学び合い』に関する研究についても多く報告されている。

対話型授業に関する授業実践も多く報告されているが、その多くは“学習者同士の対話”に着目され授業が行われている。そのため、本研究では国語の授業を行うにあたり国立教育政策研究所（2018）が課題として公表した、「話し手の意図を捉えながら、自分の意見と比べ、自分の考えをまとめる」に着目をして研究を進めることとする。授業形態は、学習者同士の関わりを通して授業改善が見込まれる『学び合い』の考え方をを用いて授業を行う。

2 研究目的

国立教育政策所（2018）が課題として公表した「話し手の意図を捉えながら、自分の意見と比べ、自分の考えをまとめる」に着目して課題を作成し『学び合い』の授業をすることで、国語に対する考え方や苦手感などの変容や、学習者の授業中の発話から授業を重ねるごとにどのような変容があるかを明らかにする。

3 研究方法

3.1 調査対象

新潟県公立小学校5学年（男子20名，女子15名）である。

3.2 調査期間

平成30年11月～（3週間）

3.3 調査単元

「レイチェル＝カーソン」（教科書：学校図書）

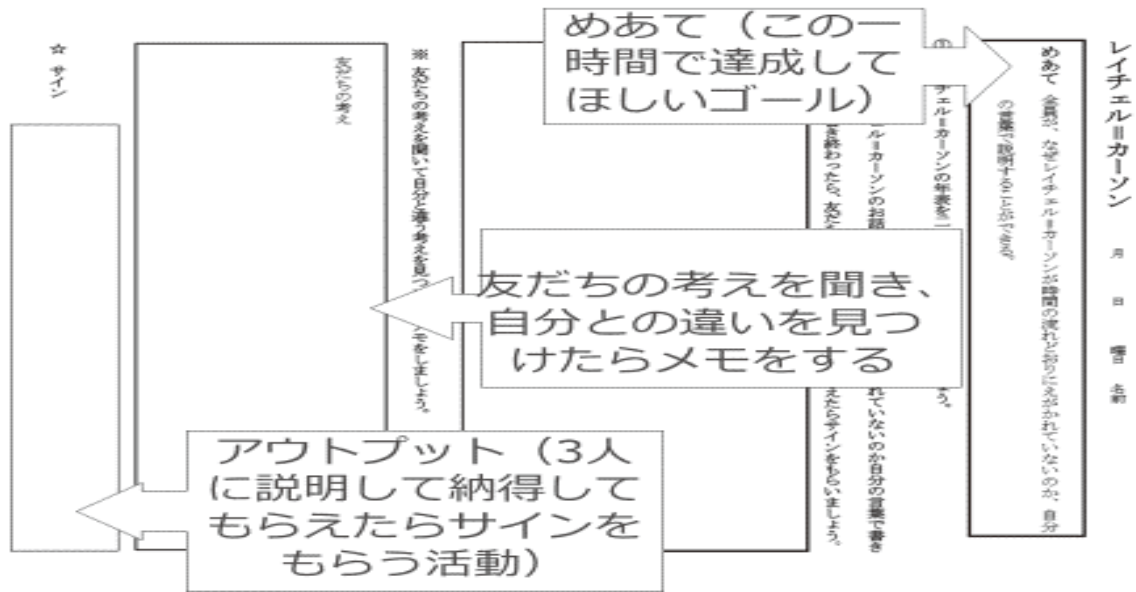
3.3.1 「レイチェル＝カーソン」の単元計画について

授業実践を行う際に学級担任と調査者で打ち合わせを行い、本単元での学習のねらいの共有を行う。また、本単元の授業時数は6時間と設定したが、担任教諭との打ち合わせにより1時間目で音読，2時間目で本文中の言葉の意味調べを行う。そのため、本研究では3.4.5.6時間目の4時間で『学び合い』の授業を行う。

「表1 レイチェル＝カーソン単元計画」

回	めあて	課題	※備考
1	レイチェル＝カーソンを音読して感想を友だち同士で交流し合おう。	・レイチェル＝カーソンを音読して感想を書こう。 ・友だちと感想を伝え合おう。	
2	【グループ活動】 音読と言葉調べをしよう。	・1～4場面を音読しよう。 ・言葉の意味調べよう。	
3	全員が、レイチェル＝カーソンがしたこと（44～54ページ）を時間の流れに沿って年表にまとめ、年表から読み取れたことや感じたことを説明することができる。	・レイチェル＝カーソンがしたこと（44～55ページ）を時間の流れに沿って年表にまとめよう。 ・①でまとめた年表から読み取れたことや感じたことを書こう。 ・書いた内容を友だちに説明をして納得してもらえたらサインをもらおう。	※『学び合い』開始
4	全員が、レイチェル＝カーソンがしたこと（55～最後のページ）を時間の流れに沿って年表にまとめ、年表から読み取れたことや感じたことを説明することができる。	・レイチェル＝カーソンがしたこと（55～最後のページ）を時間の流れに沿って年表にまとめよう。 ・①でまとめた年表から読み取れたことや感じたことを書こう。 ・書いた内容を友だちに説明をして納得してもらえたらサインをもらおう。	
5	全員が、なぜ時間の流れどおりにお話がえがかれていないのか、自分の言葉で説明することができる。	・なぜ、時間の流れどおりにえがかれていないのか考えよう。 ・考えた内容を友だちと説明し合い、納得してもらえたらサインをもらおう。 ・説明し合う中で、自分と違う考えを見つけたらメモをしよう。	
6	全員が、レイチェル＝カーソンの生き方と自分自身を照らし合わせて考えたことを、説明することができる。	・レイチェルはどのような人か、またどのような心の人なのか書きましよう。 ・レイチェル＝カーソンの生き方と自分自身を照らし合わせて考えたことを「レイチェル」「自分」「生き方」の言葉を使って書きましよう。 ・説明し合う中で、自分と違う考えを見つけたらメモをしよう。	

3. 3. 2 課題について



「図1 レイチェル＝カーソンの課題シート (5時間目)」

図1は、『学び合い』の授業5時間目に使用した課題シートである。課題に単元計画表で示しためあてと課題をワークシートに反映させ、説明する活動を入れることで児童の対話が生まれる場面を多く設定していた。また、友だちの考えを記入する欄を設けて友だちの考えから自分の考えを改めてまとめられるような手立てを行った。

3. 4 調査方法

- ・アンケート
山梨県教育総合センター（2006）が作成した国語科に関するアンケートを参考にしてアンケートを作成する。
- ・ビデオカメラ
教室の前方と後方に設置し、児童の授業中の様子を観察する。
- ・ICレコーダー
授業中の発話をICレコーダーで録音をする。

3. 5 分析方法

- ・『学び合い』授業の前後でアンケート（山梨県教育総合センター（2006））を参考に実施し、どのような変容があるのかを分析する。
- ・児童らの発話について、その対象を明らかにしたうえで、仮屋園ら（2005）が作成したコミュニケーション・モデルを参考にして作成したカテゴリーを用いて発話を量的・質的に分析する。
 - 〈分析1〉学習者へのアンケート結果と考察
 - 〈分析2〉学習者の発話の内容
 - 〈分析3〉学習者の発話の変容

3. 5. 1 分析に用いるカテゴリーについて

分析には、仮屋園ら（2005）が作成したコミュニケーション・モデルを参考にして作成した、以下のカテゴリーを用いることとする。

「表2 学習者の発話のカテゴリー」

カテゴリー	具体例
根拠を持たない主張	・根拠や理由を説明せずに答えや考えのみを示している
根拠を示して説明	・根拠や理由を説明して、答えや考えを示している ・より分かりやすい例を示して、相手に理解してもらおうとしている
同意	・相手から説明された内容に対しての肯定的な応答
尋ねる	・問題が分からないと示している ・説明された内容に対して疑問を持ち、尋ねる
確認	・「分かった?」「できた?」などの確認行為
私語	・授業に関係のない私語
注意・促し	・相手に対して、促しや注意

4 結果と考察

4.1 分析1 学習者へのアンケート結果と考察

4.1.1 学習者へのアンケート項目

学習者へのアンケートは、5学年児童（男子20名、女子15名）を対象に行った。アンケート項目に関しては、山梨県教育総合センター（2006）が作成したものを参考に作成し回答を求めた。項目は、表3の通りである。

「表3 学習者へのアンケート」

アンケートの項目
①国語の学習は好きだ。
②国語の授業は好きだ。
③国語の授業中、話し合いに積極的に参加している。
④国語の授業中、自分の良さを発揮できている。
⑤国語の授業中、自分の思うことを発言できている。
⑥国語の授業中、自分の意見や考えを持っている。
⑦国語の授業中、友達の考えと自分の考えを比較しながら聞いている。
⑧国語の授業中、はっとしたり、なるほどと思うところがある。
⑨国語の授業中、友達の発表を聞くことにより、友達の理解が深まることがある。
⑩国語の授業中、友達の発表を聞くことにより、自分の考えがより深まることもある。
⑪みんなの前で話すことや、説明することは好きである。
⑫話し合いや説明し合うことが好きだ。
⑬話し合いや説明し合うことで変わることはある。

4.1.2 各項目の平均値①

学習者のアンケート結果を以下に示す。

「表4 学習者へのアンケート結果①」

(平均値)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬
事前	2.57	2.91	2.45	2.77	3.37	3.08	3	3.17	2.85	3.08	2.17	2.88	2.34
事後	3.08	3.05	2.82	3.08	3.34	3.11	3.22	3.42	3.17	3.17	2.48	2.94	2.85

* : $p < 0.05$

表3は、学習者のアンケート結果から各項目の平均値を表したものである。今回のアンケート結果で直接確率計算による両側検定で、偶然確率 $p=0.0368$ であり有意水準5%有意差が出た。「⑤国語の授業中、自分の思うことを発言できている」の項目以外は全ての項目で上昇している。特に上昇した項目は「①国語の学習は好きだ」と「⑬話し合いや説明し合うことで変わることはある」が0.51ポイント上昇している。

4. 1. 3 各項目の平均値②

アンケートの回答方法を1「そう思わない」2「あまりそう思わない」3「だいたいそう思う」4「そう思う」で回答してもらい、1・2を否定的回答3・4を肯定的回答と分類して表したアンケート結果を以下に示す。

「表5 学習者のアンケート結果②」

(平均値)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬
事前 (肯定)	17	22	17	23	32	26	27	26	23	30	13	23	15
事前 (否定)	18	13	18	12	3	9	8	9	12	5	22	12	20
事後 (肯定)	28	27	24	29	32	30	27	33	29	29	18	27	24
事後 (否定)	7	8	11	6	3	5	8	2	6	6	17	8	11

『学び合い』の授業を行う前でのアンケートでは、①③⑪⑬の項目で否定的解答が多く見られた。しかし、『学び合い』の授業後でのアンケートでは、全ての項目で肯定的解答となった。また、『学び合い』の授業前に行ったアンケートで⑪の項目が2/3の児童が否定的回答をしたが、『学び合い』授業後のアンケートでは、半数の児童が肯定的回答をしている。直接確率計算では有意差は出なかったが肯定的回答をしている児童の増加から上昇傾向があると考えられる。

4. 2 分析2 学習者の発話の内容

4. 2. 1 『学び合い』授業中のカテゴリ別発話数の回数

『学び合い』授業の前後でアンケートを実施し、最もアンケート結果の内容に変化があった児童を1名抽出し、発話の回数をカウントしたものを以下に示す。

「表6 学習者のカテゴリ別発話数」

(授業回数)

	根拠なし	根拠あり	同意	尋ねる	確認	私語	注意・促し
1回目	8	2	1	2	1	7	0
2回目	1	1	1	8	0	6	2
3回目	0	0	2	1	1	0	0
4回目	0	4	4	0	2	0	3

『学び合い』授業の初日から、たくさんの友だちと関わり合いながら課題に取り組んでいる姿をビデオカメラの映像で確認した。根拠なしの会話が『学び合い』の授業1回目では8回であったが、回数を重ねるごとに減少している。根拠なしの会話が減少することで、根拠ありの発話が増加している。また、私語も『学び合い』の授業1回目ではとても多かったが、回数を重ねるごとに減少し、友だちに対する注意・促しの発話が増加している。

4. 2. 2 根拠なしを示す学習者の発話

「表7 根拠なしを示す学習者の発話①」

発話
レイチェルは文芸クラブに入り取材記事を書いたままだと思うよ、多分ね、分かんないけど。

「表8 根拠なしを示す学習者の発話②」

発話
これから進む道についてレイチェルは一人悩んでいました。でいいんじゃない、もう、これでいいよ、もう。

表7と表8は、『学び合い』授業の1回目で確認された、根拠なしを示す学習者の発話である。

教科書を参考にしながら、レイチェル＝カーソンの年表を作成する課題に取り組んでいる際の発話である。ビデオ

カメラで学習者の様子を確認したところ、友だちに教えている姿はあるが教科書の何ページ何行目に書いてあるよ、などの言葉が無く、「多分」という曖昧な言葉を使って教えていることが分かる。また、「で、いいんじゃない、もう、これでいいよ、もう」という発話もあり、答えのみを教えていることも分かる。

4. 2. 3 根拠ありを示す学習者の発話

「表9 根拠ありを示す学習者の発話」

発話
あ～なるほどね、なるほど。意味は分かったけど、レイチェルは才能があつてすごいついていうのをもっと具体的に書いた方がいいかも。例えば、レイチェルは科学と文学の才能がありますとか。どのようにすごいかを伝えればいいかも。

表9は、『学び合い』授業4回目で確認された、根拠ありを示す発話である。

レイチェルは才能があつてすごいと思ったという感想について学習者が、もっと具体的に書いた方が分かりやすいと、友だちにアドバイスをしている。例えば「レイチェルは科学と文学の才能がありますとか。どのようにすごいかを伝えればいいかも。」と具体的に示していることが分かる。

4. 2. 4 同意を示す学習者の発話

「表10 同意を示す学習者の発話」

発話
あ～なるほど。すごい分かりやすい説明。すごい納得した～納得。みんなの考え聞くとやっぱりいいね、もう一回色々考えてみようかな。

表10は、『学び合い』授業4回目で確認された、同意を示す発話である。

『学び合い』授業の当初から、「あ～なるほど」「うんうん」という発話が多く確認されていた。この発話では、なるほどと納得している様子の他にも「みんなの考えを聞くとやっぱりいいね、もう一回色々考えてみようかな」と述べており、友だちの考えと自分の考えを比較して、もう一度考え直すなどして、自分の考えをまとめようとしていることが分かる。

4. 2. 5 注意・促しを示す学習者の発話

「表11 注意・促しを示す学習者の発話」

発話
関係ない話はもうやめようよ。すぐそうなる。君がそういう事するからね、みんな終わらないの。あと15分しかないよ、真面目にやろうよ。

表11は、『学び合い』授業4回目で確認された注意や促しを示す発話である。

学習者に対してちょっかいや口出しをする友だちに向けた発話である。『授業の1回目と2回目では私語がとても多かったが、『学び合い』の授業4回目では、「関係ない話はやめよう」や「あと15分しかないよ、真面目にやろう」など、友達の言動を注意するだけでなく、促している様子が分かる。

4. 3 分析3 学習者の発話の変容

分析2で示した発話をそれぞれ比較する。

4. 3. 1 根拠なしと根拠ありの発話の変容について

表12は根拠なし、表13は根拠ありの学習者の発話である。『学び合い』の授業の当初は、「多分」「これでいいんじゃないもう」という言葉を使って根拠を示さずに友だちに説明をしている発話が多かった。しかし、『学び合い』の授業を重ねた結果、「もっと具体的に書いた方が分かりやすい」と、友だちにアドバイスをしている。以上のことから、根拠なしの主張・説明から根拠ありの主張・説明へと変化している。

「表12 根拠なしを示す学習者の発話」

発話
・レイチェルは文芸クラブに入り取材記事を書いたままだと思うよ、多分ね、分かんないけど。 ・これから進む道についてレイチェルは一人悩んでいました。でいいんじゃない、もう、これでいいよ、もう。

「表13 根拠ありの学習者の発話」

発話
あ～なるほどね、なるほど。意味は分かったけど、レイチェルは才能があつてすごいっていうのもっと具体的に書いた方がいいかも。例えば、レイチェルは科学と文学の才能がありますとか。どのようにすごいかを伝えればいいかも。

4. 3. 2 私語と注意・促しの発話の変容について

表14は私語、表15は注意・促しの発話である。『学び合い』の授業当初は、表14のような私語がとても多く、ビデオカメラで学習者の姿を確認したところ、積極的に課題に取り組もうとする姿を見ることができなかった。しかし、『学び合い』の授業を重ねるごとに私語が減少し「関係ない話はやめよう」や「あと15分しかないよ、真面目にやろう」など、友達の言動を注意するだけでなく、促している。このことから、私語をして課題に積極的に取り組まない姿から、友だちの言動に注意をし促す姿へと変化している。

「表14 学習者の私語」

発話
ねえねえ、これどういうこと？てかさ、あの曲聞いた？うふふ、やっぱ良いよね。

「表15 注意・促しを示す学習者の発話」

発話
関係ない話はもうやめようよ。すぐそうなる。君がそういう事するからね、みんな終わらないの。あと15分しかないよ、真面目にやろうよ。

4. 3. 3 同意の発話の変容について

学習者は、『学び合い』の授業当初から友だちの考えを聞く際に、「うんうん」「へえ～なるほど」という発話があった。しかし、『学び合い』の授業3回目と4回目では以下のような発話が見られた。「うんうん」「へえ～なるほど」という発話に加えて、「わたしもそれに近い考えだけど、伝記と物語文の違いのところが少し違うね」「〇〇ちゃんの考え聞いて書いたやつなんだけどもっと違うよ」と比較をしている発話や「私ももう少し考えてみる、また聞いて」「みんなの考え聞くとやっぱりいいね、もう一回色々考えてみようかな」とさらに自分の考えをまとめようとしている発話が見られるようになった。

また、課題作成時に、シートに友だちの考えと自分の考えを比較し、さらにまとめることができるような手立てを行った結果であると感じられた。

「表16 同意を示す学習者の発話（3時間目）」

発話
うんうん、分かりやすいね。わたしもそれに近い考えだけど、伝記と物語文の違いのところが少し違うね。これ、〇〇ちゃんの考え聞いて書いたやつなんだけどもっと違うよ。私ももう少し考えてみる、また聞いて。

「表17 同意を示す学習者の発話（4時間目）」

発話
あ～なるほど。すごい分かりやすい説明。すごい納得した～納得。みんなの考え聞くとやっぱりいいね、もう一回色々考えてみようかな。

4. 3. 4 学習者の振り返りシートの内容について

学習者の振り返りシートの内容を確認したところ、4. 3. 3で明らかにした同意を示す発話の変容に関連した内容が記載されていた。表18は振り返りシートの内容である。授業の初めは一人で取り組み、苦戦した様子が書かれている。しかし友だちの考えを参考にして自分なりの答えを導き出し、友だちと交流できた喜びも記載されている。また、友だちの考えからもう一度自分の考えを見直したことも記載されている。

「表18 学習者の振り返り内容（3時間目）」

振り返り
最初は一人で考えていてなんで伝記が時間の流れどおりに書かれていないのか思いつかなかったけど、〇〇ちゃんの考えをヒントにして色々考えて、友だちと考えをこうかんできてよかった。色んな友だちの考えを聞いてまた考えたりできた。今日はすぐ時間が終わった。

5 まとめ

本研究では、学習者の変容について、以下の5点が明らかになった。

【分析1】

- ・『学び合い』授業を通して、国語に対する考え方が肯定的になることが明らかになった。
- ・国語に対して抱えていた苦手感も減少することが明らかになった。

【分析2, 分析3】

- ・『学び合い』の授業を通して、根拠なしの主張・説明から根拠ありの主張・説明へと変化していることが明らかになった。
- ・「なるほどね」「うんうん」など肯定的な応答だけでなく、友だちの考えと自分の考えを比較し、もう一度考えようとすることも明らかになった。
- ・私語をしている姿から、友だちに「関係ない話はやめよう」と注意をする回数や「あと15分しかないよ、真面目にやろうよ」など促す回数も増加することも明らかになった。

6 今後の課題

今後の課題を2点述べる。

1点目は、本研究は事例的研究であり、対象者は35名ととても少ない。そのため今後は対象者を増やし調査していく必要がある。

2点目は、本研究で明らかになった結果は多くの研究でも明らかにされている点と類似している。そのため子どもの変容について、さらに多様な視点で調査する必要がある。

引用および参考文献

- (1) 文部科学省 (2017)：小学校学習指導要領（平成29年告示）
- (2) 文部科学省 (2017)：小学校学習指導要領（平成29年告示）解説，総則編
- (3) 国立教育政策研究所 (2018)：平成30年度全国学力・学習状況調査の結果
- (4) 佐藤公治 (1999)：対話の中の学びと成長，金子書房
- (5) 丸野俊一 (1999)：ディスカッション技能・態度の養成・開発に関する理論的・実践的研究 平成8年度～平成10年度科学研究費（基盤研究A (1)）研究成果報告書
- (6) 西川純：「すぐわかる！できる！アクティブ・ラーニング」，学陽書房，p.31，2015
- (7) 山梨県教育総合センター (2016)：国語の学習等に関するアンケート調査
- (8) 仮屋園昭彦・丸野俊一・綿巻徹・高橋豪：児童の話し合い場面におけるコミュニケーション・モデル構築の試み，鹿児島大学研究紀要，教育科学編，第56巻，pp.165-205，2004

A Case Study on the Transformation of Learners in “Learning Participants” Class

Unit in elementary school language class
From the practice of “Rachel = Carson”

Kanae UENO* · Jun NISHIKAWA**

ABSTRACT

The purpose of this research was to create a task focusing on “to compare my opinion compared to my own opinion while grasping the intention of the speaker” that the National Education Policy Research Institute (2018) published as an issue. By doing “classes of learning” classes, we will clarify the transformation of the ideas and difficulties that learners have against the national language and the transformation of utterances during class. As a result, the sense of weakness against the Japanese language decreased before and after the “classroom” lesson. Furthermore, learners also on the content of the speech transformation can be seen, the number of utterances of [described by showing the grounds] [consent] [prompt attention,] it was revealed that has increased.

* Shimoina-gun Hiraya village Hiraya Elementary School **Division of Teacher Profession, Joetsu University of Education